

プラン名称: 川の上で宿をとれ -宿り橋を地域活性化の架け橋へ-

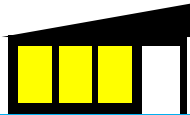
チーム名	都市文化共生計画研究室	対象地域	山梨ステージ
大学名	筑波大学	テーマ	ミズベリングと連動した富士川水系流域の「観光まちづくりプラン」
リーダー名	和田桃乃		
指導教員名	松原康介		
メンバー名	大津友瑛 掛神有希奈 齋藤真紀子 西川愛莉 堀江真里子 守興尚史		

【本選出場】パフォーマンス賞 受賞

宿り橋を地域活性化の架け橋へ

本プランは「川の上で川の字になって寝たい」というアイデアから発展したものである。水辺の空間はこれまで川岸など「横のひろがり」に限定されている場合が多かったが、今回は「橋」に着目し、「縦のひろがり=ミズベ」を提案しており、同時に橋そのものが観光の「拠点（目的）」になりうる可能性を見出している。

本プランにおいて私たちが観光資源として特に注目したのは、富士川町十谷地域の大柳川渓谷である。私たちはここから川を有する様々な地域へ活性化の架け橋をわたしていくことを提案する。



富士川町十谷地区一大柳川渓谷

■宿り橋とは

大柳川渓谷は美しい水辺と10本の吊り橋が織りなす景観が特徴の自然豊かな観光スポットである。周辺には温泉などの施設が存在し、高いポテンシャルを持つ。本プランではここに宿泊に特化した橋、通称「宿り橋」をかけ、観光まちづくりを促進する。

【特徴①コンテナハウスによる簡易性】

「宿り橋」は、より親水的な空間演出のため開口部やテラス面積を大きくとった。その上にコンテナハウスを設置することで耐久性や経済性に配慮した。階段を上がりテラスを通して反対側に降りるといった橋としての動線を確認しつつ、居室内からも川の景色が十分に楽しめる。床面が水面から2m上がっており、また、軽い構造物であるため増水時には浮くことで安全性を確保する設計となっている。



【居住空間部分】約9畳  
【テラス部分】約11畳  
【定員】大人3名  
【棟数】3棟  
【建設地】大柳川渓谷 竜門橋付近



【特徴②湯泊食分離】

日本の観光宿泊施設は「宿泊」「入浴（温泉・銭湯など）」「食事」の全てを1カ所で提供するケースが多いが、近年これらの機能を別々の施設に分けることで観光客によるまちの賑わい創生を図る動きが出ている。これにより観光客がより多様で自身のスタイルに即した時間や場所を楽しむことができると同時に、地域に及ぼされる経済効果の増大が確認されている。本プランではこうした事例を参考に、宿り橋での「湯泊食分離」を提案する。



問題認識・解決策

対象地の大柳川渓谷には2つの問題点がある。第一の問題は**認知度が低いこと**である。大柳川渓谷には十分なポテンシャルがあるにもかかわらず、橋が架けられてから比較的年数が浅い故に、その存在はあまり知られていない。

第二に**大柳川渓谷をメインとした観光のモデルプランが確立されていない**という点である。そのため、観光客がこの地域の魅力を堪能しきれない可能性が課題として挙げられる。こうした課題に対して、人々が**大柳川渓谷とともに周辺施設にも足を向けるような拠点を設ける**ことが有効と考えた。

こうした拠点整備は、**話題作り**になると同時に、渓谷周辺の様々な**魅力に触れる機会を増やす**と考えられる。

新規性

本プランは2つの新規性を有する。1つ目は、水辺の**縦のひろがり**を提案している点である。これまでの水辺の使われ方は川岸など横のひろがりにとどまっていることが多かった。これに対し、本プランでは橋を用いることで新たな「ミズベ」の概念を生むと期待される。

2つ目は、**橋を拠点（目的）としてとらえている**点である。橋はこれまで人や物の通過点（手段）にすぎなかったが、本プランでは**宿泊**という目的機能を橋に持たせている。

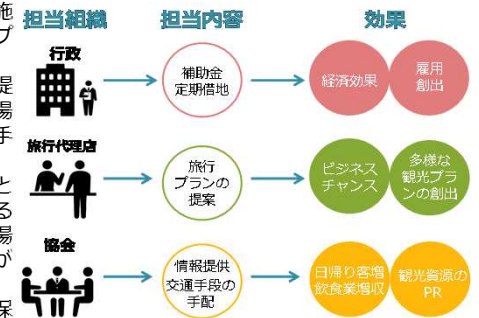
実現計画

本プランは事業主を中心に、十谷地域周辺の温泉・飲食施設、行政、観光物産協会、旅行代理店によって組織されたプロジェクトチームによって進行される。

旅行代理店は宿り橋への宿泊を中心とした旅行プランの提案を行い、顧客を獲得する。観光物産協会は現場に近い立場を活かして、観光客や旅行代理店に情報提供を行い、交通手段の手配などを担う。

行政は補助金を提供し、事業主の定期借地を認可することで実現の基盤を構築する。これらの業務が適切に遂行されることによって雇用やビジネスチャンスが生まれ、観光客は湯泊食分離方式により自由な組み合わせで観光を楽しむことができ、まちに大きな経済効果をもたらすと考えられる。

宿り橋は旅行代理店が年間契約で借りることで収益を確保するため、本プランの実現可能性は極めて高いと考えられる。



効果（大柳川渓谷編）

本プランの実現により、以下のような効果が期待される。

まず、大柳川渓谷の既存の魅力である多様な橋と、橋の上に泊まるという体験が組み合わせられることによって、橋をテーマとした大柳川渓谷周辺の地域ブランドが確立する。

次に、宿り橋を拠点としたビジネスサイクルが生まれる。橋の建設や維持管理において多くの雇用が生まれることで、周辺地域の発展に貢献すると考えられる。

効果（日常生活・笛吹観光編）

橋を拠点にする考え方は、川を有する対象地域に住む各主体のニーズや特徴に合わせて発展させることが可能である。笛吹市を例にとると、地元住民の日常生活面と、観光スポット面という2つの活用が考えられる。まず、日常生活面では、買い物難民をなくす**舟上マーケット&市場橋**や、**水上交通のバス停**などが考えられる。一方で、観光スポット面では、鶺鴒鑑賞のための**座敷橋**やワインを楽しむ**ワインバー**、日照時間の長さを活かした**ドライフルーツ干し橋**、旅の疲れを癒す**足湯橋**などが考えられ、いずれも水辺の空間を有意義に利用した橋の拠点が生まれる。